



シリーズ ユニセフってなんだろう3

子どもにとっていいことは大人にもいい

「子どもの権利条約」が生まれて20数年が過ぎたにもかかわらず、日本ではいじめや児童虐待など子どもに関する事件や事故が後を絶ちません。本来、のびやかに育つべき子どもたちの日常は、どうしたら取り戻せるのでしょうか。兵庫県川西市の「子どもの人権オンブズパーソン」代表として、長年、SOSを出す子どもたちの声を聴き、ともに解決の方法を考え続けてきた桜井智恵子さんに、子どもの権利、人権を守るこの意味についてうかがいました。



桜井智恵子
大阪大谷大学教授

弱っている子どもを中心に

——子どもの人権オンブズの経験から、大津で起こった中学生自殺の事件をどのように見られますか。

桜井 一連の報道から、ちっとも子どもの話が出てこないと思いました。オンブズパーソンは当事者の子どもの気持ちを聞いて、周りに発信・代弁できるというシステム

ですが、その肝心の、中心にいるべき子どもがいないという場合に、どのように子どもの最善の利益を見つけていくのか、至難の業ですよね。

——弱っている子どもがいたら、オンブズではその子の話を聞くことから始まる？

桜井 それがすべてです。その子が何をしたいかに沿ってサポートするので、こちらが教育的配慮でもって動くことなどできません。

——それが子どもの人権を尊重するということですか。

桜井 そうですね。権利の主体というのは、その子にとって主体的に何が幸せか、どういうふうにしたいかを、自分でゆっくり考えられるということです。決して一人で勝手に決めるということではなく、子どもの権利というのは関係のだから、周りの人たちとやり取りするなかで見つけてゆきます。

多くの大人が、子どもが弱っているときに子どもの話はあま



川西市子ども人権オンブズパーソン。相談員が子どもから話を聞かせてもらう

り聞かない。それより励ましたり、休んだらいいとか伝えるんです。それは大人の配慮で、救済しようとしている大人の側からの優しさです。でも、子どもによって次の一步が違うんです。そうしたときに救済の主体というのは、その子のやり方で次に進むという^{こと}で、大人はあくまでも脇役です。

そもそも人権は傷んでいる人をサポートするツールとして、フランス革命の時代に成立しているんですね。不平等になっているところを、少しなめらかにしましょうというのが人権です。思想であり、哲学ですから、権利は必ずこれだと決められなくて、一つひとつ考えてサポートしていくというものです。日本には明治期、オランダの言葉から入り、福沢諭吉は人権を「当たり前のこと」と訳しました。そのほうが分かりやすいかと思います。

教育における危うさ

——開発途上国と先進国では、子どもの置かれている状況に大きな開きがあります。なかでも子どもが受ける権利としての教育について、どう考えますか。

桜井 以前、ユニセフのイノチェンティ研究所のトロント・ボーゲさんとお会いしたときに、私は日本の教育についてお話をしました。日本は、とにかく国力の不足を教育で乗り越えるんだと、皆が教育、教育と言っている。自分が学びたいというより、国の政策で高度経済成長するための人材養成に教育が欠かせず、その結果、過大な競争が強いられてきました。教育は過剰となり、いつも子どもたちは締めつけられ、休むこともできず、命さえ失っているという状況を説明しました。それに対してボーゲさんは、ユニセフは教育の普及のためにさまざまな国々に学校を作ってきたけど、それではまずは学校を作り、教育を与えましょうという話では危ういということですね、そういうことを考えたこともなかったと、大変驚かれました。

このことは、かつて高度経済成長期の日本で、公害の発生する工場をアジアの国へ移して、激しいバッシングを受けたように、教育過剰を起こした国がそれを改善せず、他の国へ広がるのを防がなければ、まったく同じことになります。

今日もニュースで学力テストの結果を学校ごとにすべて公開するとか、学力の高い学校だけが生き延びるという方法だったりするのを聞くと、私はいま教育にますます厳しい締めつけが起きていると見ています。多くの教育学者がいかに学力を上げるかとか、教育システムをどうするかという話はしますが、教育過剰について言う人はなかなかいません。それはどこを見て、生きていくかの違いかなと思います。

——教育に国や社会の方向性が深くかかわっているということですか。

桜井 だから、経済界も教育を手離さないですよ。イギリスのブレア前首相の就任演説で、一にも二にも三にも教育だと言ったのは有名ですが、教育をつかんでおけば、人材育成



2009年6月、イタリアで開催された「オンブズ8サミット」で世界の子どものオンブズとともに

の仕組みを持っていることとなります。

しかし、子どもの権利とは、子どもが国のデザインのために命や人生を終えることではありません。国よりも個人が最善に生きるということを重視し、子どもの権利を守るというのは、そうすることで国が良くなるというメカニズムで考えられているのが人権思想なんです。

ですから、子どもにとっていい社会は、大人や障がい者にとってもいい社会だということを、きちんと共有しなければならない。それを具体的に、心構えだけでなく、制度に結びつけることが必要だと思います。

思いっきり遊べる子ども時代を

——といっても、日本の親はとかく自分の子どもの将来が心配です。

桜井 今年の3月、子育てとワークシェアリングのつながりを見たくて、オランダに行ってきました。今の教育過剰は雇用不安と結びついているから、仕事があれば雇用不安にならないし、子育てで不安にならないのではないかと考えて行っただけです。結果として大当たりで、オランダの親たちは誰に聞いても子どもの将来に不安を持っていませんでした。ワークシェアリングによってパートタイマーは全員正規という国で、子育て中の親などは週3日、一日4時間働いて、すべての保障が付いています。子どもは将来必ず仕事に就けるから、先取りして勉強しなくても済み、今を喜ぶことができます。

——子どもの人権を高め、守っていくことは社会にとってどんな意味があるのでしょうか。

桜井 子どもにとっていいことが大人にとってもいいということです。それはどういうことだと思いますか？

——大人がゆったりと子育てし、人生を楽しむ暮らしですか。

桜井 そうです。子どもたちもそれを望んでいて、思いっきり泥や水で遊びたいと思っている。本来、子どもは土と水さえあれば永遠に遊んでくれる天才だから、遊びのアイデアが山のように出てくる。そんな子ども時代を保障できるような暮らしで、きっとできるんですよ。（聞き手・近藤）